この学びに関するSDGsの目標

13 気候変動に具体的な対策を

大学の学び

環境問題と経済を結びつけて学び、議論・表現を通じて問題解決力を身につける

創価大学 経済学部 経済学科 掛川ゼミ

1年次からSDGsについて学べる科目群を開講

創価大学経済学部は、グローバルな経済社会を担うリーダーの育成を目指している。同学部経済学科3年の平野美輝（みき）さんは、入学の動機を次のように話す。

「高校時代から難民問題や貧困問題に関心があった私は、経済の視点からそれらについて学びたいと考えていました」

1・2年次は、学部必修科目の「ミクロ経済学」などのほか、全学部共通科目「世界市民教育科目群」での「環境と開発」など、SDGsに関連した内容を学ぶ。経済学科3年の古賀誠人（まこと）さんは、同科目群の1つである「環境科学B」を2年次春学期に履修し、気候変動などの環境問題について関心を持った。

「『環境科学B』では、少人数でのディスカッションを通じて、環境問題への考えを深めていきました。その授業中、先輩から、アルバイト先の上司にゴミの新たな分別方法を提案したという話を聞きました。自分もその先輩のように、環境問題の解決に向けて行動を起こせるように、もっと勉強したいと思いました」

私たちが紹介します

経済学部経済学科 3年
古賀誠人（こが・まこと）
千葉県・私立流通経済大学付属柏高校卒業。

経済学部経済学科 3年
平野美輝（ひらの・みき）
秋田県立能代高校卒業。

同学部では、高等教育レベルの英語力の育成にも力を入れており、英語で経済学を学ぶ「インターナショナルプログラム」を実施している。古賀さんは1年間、平野さんは2年間、同プログラムに参加した。

「英語で書かれた経済学の教科書を要約し、その内容を発表する課題などを通じて、英語の4技能すべてが鍛えられました」（平野さん）

ゼミでは、多角的に考える力や解決策の創造を重視

2年次秋学期には、自分の関心に応じて、経済理論・統計学、現代経済、グローバル地域経済、SUCCEED（＊1）の4つのクラスター（科目群）から1つを選択。また、ゼミにも所属し、専門的な学びをスタートさせる。

古賀さんは、環境問題や開発問題を学びたいと考え、環境経済学や農業経済学が学べる現代経済クラスターを選択。平野さんは、1年次に参加したフィリピンでの語学研修やケニアでの海外研修も踏まえ、グローバル地域経済クラスターを選択した。

「研修中に受けた講義で、地球温暖化による海面上昇のために自国を離れなければならない『環境難民』の存在を知り、衝撃を受けました。経済と貧困問題とのつながりだけでなく（**目標1**）、環境問題とのつながりも学びたいと考えました（**目標13**）」（平野さん）

ゼミは、古賀さん、平野さんとも、国際的な開発問題や環境問題を研究し、「**目標13　気候変動に具体的な対策を**」にも貢献する研究に取り組

この学びに関する他のSDGsの目標

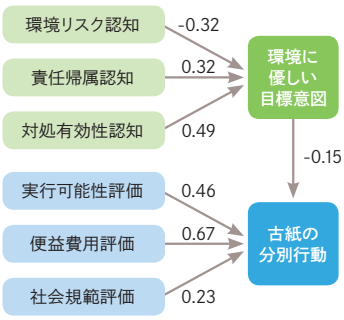
1 貧困をなくそう
7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに
11 住み続けられるまちづくりを
12 つくる責任 つかう責任
15 陸の豊かさも守ろう

＊1　英語による講義のみで構成されるコース。基準を満たした人のみが受講でき、留学生と一緒に英語で経済学を学ぶ。

む掛川ゼミに入った。ゼミでは、2年次秋学期は主にディスカッションを通じて、環境経済学について学ぶ。3年次は、開発経済学を学びながら、卒業論文の草稿を各自作成。加えて、各ゼミから1グループが出場できる、学部内のゼミ対抗研究発表大会への出場権獲得を目指し、3グループに分かれて研究を進める。発表大会への準備の中で、社会問題の分析や議論を通じて、発表力や多角的に考える力、解決策を導く力を鍛えていく。

今年度の大会に出場したのは、大学のキャンパスがある東京都八王子市の古紙の回収率を上げるための研究を行った平野さんのグループだ。

図1　学生の古紙分別行動の回帰分析結果



学生の古紙分別行動は何に起因しているのか、先行研究(＊2)を参照し、アンケートを基に回帰分析を実施。数字は標準偏回帰係数を示し、便益費用評価が一番正の影響を及ぼしていることが分かった。

＊平野さんの資料を基に編集部で作成。

「八王子市の可燃ゴミの中に、資源として回収可能な紙類が約9％含まれていることが分かりました。原因は、分別意識の不足にあると仮説を立て、市内の5地域の住民に、アンケート調査を行いました」

その結果、特に学生は古紙分別を負担に感じていると判明した（図1）。そこで、負担感をなくし、古紙の回収率を向上させるため、古紙専用の回収袋の配布を市に提案する方向で研究をまとめ、学部のゼミ対抗研究発表大会で1位を獲得した。

古賀さんのグループは、学内の再生可能エネルギーの利用率向上を研究テーマに選んだ（図2）。

「本学の再生可能エネルギーの利用率はわずか1％です。調査では、学生の9割が再生可能エネルギーの利用に賛成しました。その結果を踏まえ、本学のSDGs推進センターに、太陽光パネルの増設、再生可能エネルギーの購入などを提案する予定です（目標7・11）」

将来の進路に結びつく研究を卒業論文のテーマに

4年次は、卒業論文に向けて各自、研究を深める。掛川ゼミでは、将来の進路に結びつく研究を卒業論文のテーマに設定する学生が多い。

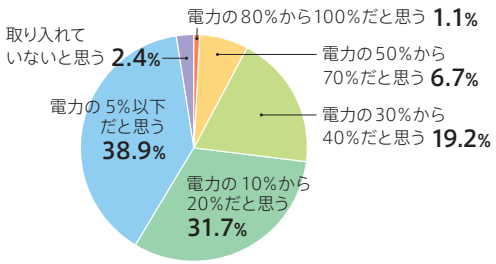
「私は、再生可能エネルギー業界への就職を希望しており、日本における再生可能エネルギーの普及に必要な政策の研究をしています。ゼミでの学びは、企業研究にも生きています」（古賀さん）

食品業界に関心のある平野さんは、環境に配慮したコーヒーの栽培について研究予定だ（目標15）。

「森林伐採をせず、木々が生い茂る中でコーヒーを栽培する方法もあります。環境に優しい食品産業のあり方も追究したいです（目標12）」

図2　学生への再生可能エネルギーに関する調査

◎創価大学の再生可能エネルギー率は何％だと思いますか？



実際の利用率１％とは大きな差が見られる。

＊古賀さんの資料を基に編集部で作成。

学びとSDGs

社会課題について多角的に考え、自ら行動を起こす人材に

経済学部　経済学科
准教授
掛川三千代
かけがわ・みちよ

本ゼミでは、環境経済や開発経済の基本的な考え方や理論を学ぶとともに、社会課題について多角的な視点で考えられるよう指導しています。例えば、政策を議論する際、学生に「市民にとって最善の効果が出ているか」、「その手法は途上国でも最善か」などと問いかけ、徹底的に議論します。

また、私自身の国連開発計画やJICA（＊3）などでの実務経験を生かし、理論と現実社会をつなげる授業を心がけています。学生が発表する際、「国としてできること」「企業や自治体としてできること」に加え、必ず「自分たちができること」についても考えてもらうようにしています。自ら行動を起こす人材を育て、国際機関や自治体、企業等で、持続可能な社会づくりに貢献してほしいと願っています。

高校時代には、学んだ知識を基に社会課題について考え、友人と意見交換しましょう。そうした習慣は、よりよい解決策を創造していくための基礎力となるはずです。また、自分の好きな分野や得意分野も見つけてください。それが、将来の仕事につながります。

＊2　広瀬幸雄、『環境と消費の社会心理学』(1995)。　＊3　国際協力機構。